

カニジル

鳥大の人々

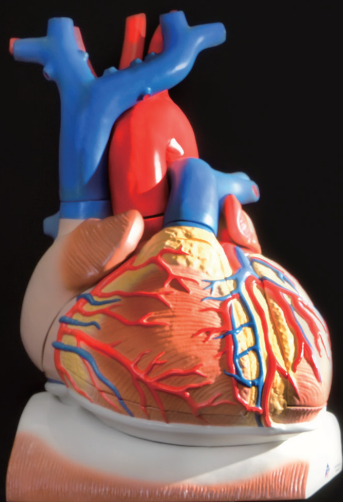
吉川泰司

(鳥取大学医学部附属病院 心臓血管外科 教授)

病院長対談

岡村直樹

(アステラス製薬 代表取締役社長CEO)



大人気連載！

川口和久の剛速球コラム

「鳥取生活ただいま満喫中」



医療最前線を知る

とりだい病院

「高度生殖医療センター」

フォトボルタージュ

とりだいフェス 2026

七夕まつり

医療と宇宙が出会う日

病氣にかからない、あるいは怪我をしないという人はいません。医療は生活に切り離せないものです。それにもかかわらず、病院を敬遠したり、垣根が高いと感じる人も少なくありません。そこで、医療の世界を「いかに知ってもらうか」↓「いかに知る」↓「カニジル」となりました。

もちろん、とりだい病院のある鳥取県の名産品、〆蟹のだし(味噌)汁にも掛けています。蟹汁のように、皆さまに愛される存在でありたいという思いも込めました。

「カニジル」が第一にこだわるのは「ファクト」です。医療に関して、不正確な情報が世の中にはあふれています。短く、分かりやすい言葉は人々の心に突き刺さりやすい。しかし、現実はその簡単ではありません。分かりやすくするため、大切なものを多くそぎ落としています。

あまり知られていませんが、医療は、科学的に証明されていることとそうでないことを完全に二分できない世界です。その時点でのファクト・エビデンスを重んじていても、そのファクト自体がひっくり返ることもあり得る。大切なのは、愚直に取材し、確かな文献に当たり、真摯に考える——それが我々の姿勢です。IT(情報技術)、SNS(ソーシャルネットワーク・キングサービス)の発達により、我々が手にする情報は爆発的に増えました。その中から、いかに正確な情報を選び取ることができるか。生命の危機にも直結する医学では、その力が特に必要になってきます。カニジルはそのお手伝いをしたいと考えています。

とりだい病院は、医療機関であると同時に、職員、患者を合わせて1日の滞留人口は約4千

人から5千人。この地域でもっとも人が集まる場所です。

原田省・前病院長(現・鳥取大学学長)は、〈すぐれた文化を展開〉し、〈人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持〉する可能性を秘めているという意味で、病院は「社会的共通資本」であると定義しました。この「社会的共通資本」は、米子市出身の世界的な経済学者、宇沢弘文氏が提唱した言葉です。宇沢氏は、著書の中で社会的共通資本を〈一人ひとりの人間的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を最大限に維持するために不可欠な役割を果たすもの〉とも書いています。

2023年4月から原田氏の後を継いだ武中篤病院長の下で、とりだい病院サポーター制度「地域と共に創る自慢のOur hospital」が始まっています。武中病院長は「社会的共通資本である国立大学病院に、住民の方々にボランティアとして関わり、喜び、やり甲斐を見つけていただくこと。そしてサポーター同士、職員、学生たちと新たなコミュニティを創ってもらいたい」と語ります。そして、とりだい病院が「Our hospital」(アワーホスピタル)、つまり「私たちの自慢の病院」となることが最終目標であると。こうしたとりだい病院の挑戦、考えを、この「カニジル」および「カニジラジオ」(BS S山陰放送ラジオで毎週土曜日ひる0時25分からオンエア)で伝えていきます。

とりだい病院のある米子市を含めた山陰地方は、「過疎」「超高齢化社会」という日本が抱える問題が凝縮されています。一方、人との温かいつながり、自然など、都会にはない豊かさがある。問題を解決しつつ、豊かさをどう維持していくか——。先んじて未来の問題を解決できる場所なのです。

CONTENTS

- 03 アメリカで最先端の技術を習得して帰国、そして鳥取へ——後進に伝えているのは「患者を自分の家族に置き換えて考えること」——鳥取大学医学部附属病院 心臓血管外科 教授
吉川泰司
- 06 医療最前線を知る とりだい病院 高度生殖医療センター「ART」「男性不妊」「不妊カウンセラー」
- 10 フォトルポルタージュ 夏の祭典！ 来年もやるよー とりだいフェス2026 セタまつり 医療と宇宙が出会う日
- 14 これが、私の「IKIGAI」!! 第3回 上田敬博(鳥取大学医学部附属病院 高度救命救急センター 教授)
- 16 病院長が話題の人物に迫る！「武」に「虎」——アステラス製薬 代表取締役社長 CEO
岡村直樹

- 20 カニジルブックレビュー 特別編 医療従事者は「話題の本」をこう読む 第10回『とりだい秘史 なぜ鳥取大学医学部は米子にあるのか』豊島良太 カニジルパブリッシング 鳥取大学医学部長 整形外科 教授 永島英樹
- 21 一緒に「Our hospital - 私たちの病院 -」を作りませんか？ とりだい病院サポーター通信
- 22 【新連載】川口和久の剛速球コラム 「鳥取生活ただいま満喫中」
- 23 2029 年新病院着工へ とりだい「未来病院」発進!! 「私」なら、こうする&こうしたい! 鳥取大学医学部附属病院看護部 副看護師長 岡 優樹
- 24 シン・トリビート フォトグラファー七咲友梨が切り取る、とりだい病院の日常

Kanijiru vol.23 Staff

スーパーバイザー	黒崎雅道 (とりだい病院 副院長)	写真	馬場磨貴
編集長	田崎健太 (株式会社カニジル)		七咲友梨
編集	中原由依子 (株式会社カニジル)		中村 治
	石谷昌子 (株式会社カニジル)	デザイン	三村 漢 (niwanoniwa)
	両角浩太郎 (株式会社カニジル)		山本怜央
編集委員	藤原和典 (とりだい病院 広報・企画戦略センター長)	印刷・製本	サンエムカラー
	宮田 麗 (とりだい病院 広報・企画戦略副センター長)		



写真 馬場磨貴



アメリカで最先端の技術を習得して帰国、そして鳥取へ——後進に伝えているのは「患者を自分の家族に置き換えて考えること」

吉川泰司 鳥取大学医学部附属病院 心臓血管外科 教授

日本の心臓移植が再び動き出す場所に居合わせた若き医師は、経験を積むため渡米しアメリカの医師免許を取得。アメリカは世界から人材が集まる激しい競争社会である。日本人ならではの「真面目さ、勤勉さ」で世界屈指の名医の信頼を勝ちとり、最先端の技術を習得。今、鳥取の地で、手薄になりがちな心臓外科医の後進育成に力を注ぐ。

吉川泰司が心臓を専門にしようと心に決めたのは、大阪大学医学部1年生のときだった。「医学序説」という医療の総論を学ぶ授業に第一外科(現・心臓外科)の教授、川島康生が来たのだ。

「川島先生は心臓移植の話をされました。心臓が悪くなった患者さんに他人の心臓を移植することで元気になる。そんなことができるのかと驚きました」

心臓移植とは、患者の心臓をほぼすべて切除し、脳死と判定された臓器提供者(ドナー)の心臓に置き換える手術である。心臓移植の歴史は古い。

1967年、南アフリカの心臓外科医が世界初の心臓移植に成功。翌68年、札幌医科大学で日本初の心臓移植が行われている。しかし、この手術はドナー(臓器提供者)が脳死状態だったのか、心臓摘出の時期は適切だったのかと問題視された。法整備の不備もあり、医療倫理、心臓摘出の違法性が問われたのだ。

以降、30年間日本では心臓移植手術が行われることはなかった。このとき、川

島が、臓器移植法の法整備などに奔走していたことを吉川は知らない。

96年3月、吉川は大阪大学医学部を卒業、国家試験に合格、希望通り第一外科の研修医となった。第一外科は大阪大学医学部の看板である。頭脳に加えて、体力、精神力が要求される。

「入局した日から当直でした。朝の7時から夜中の3時までの勤務。基本、持ち場から離れてはだめ。ご飯のときだけ抜ける。看護師さんが休みに入ると、その役割も我々の仕事。回診では、この患者さんに何のお薬が入っているのかと上司から突然聞かれることもある。薬の名前はもちろんですが、それがどういう作用なのかも答えなければならぬ。答えられなかったら、どんな副作用が起るかわからないのに薬を出してはならないだろうと叱られる。ごもつともなんです、それがなかなか大変なんです」

ずっと薬の本と辞書を持ち歩いて、次に何を言われるのか先回りして考えるようにしていましたね、と振り返る。最初の1年間はほとんど病院に泊まり込み、家に帰るのは週に1回程度だった。

「病院に寝泊まり、荷物はトランクルームという同級生もいました。少々のことではへこたれない精神力は鍛えられました。それだけ必死だったから成長スピードは速かった」

97年に臓器移植法が制定、99年に心臓移植が再開される。執刀したのは、第一



たを支える、と」

ハシムは少し考えさせてくれという返事だった。翌日、吉川はハシムに呼びだされた。吉川は条件を受け入れるという。

ハシムの手術で手術室に入るのは基本3人。ハシム、吉川、専属ナースだ。

「助手の位置に入ろうとしたらヨシ（吉川の愛称）、そこじゃない。お前は術者だ」って。そこから400例すべて一緒にやらせてもらいました」

ハシムもまたアメリカでは外国人である。アジアから来た自分に共感を持ったのかもしれないと吉川は考えている。

彼は僧帽弁の形成術において世界的権

外科教授を川島から引き継いだ松田暉だった。吉川の上司である――。

吉川は日本の心臓外科が大きく動き出す時期、その最前線に居合わせたのだ。

他と差をつけるには、日本人の真面目さ、勤勉さしかない。

2001年10月、吉川はコロンビア大学のリサーチフェローとしてアメリカに渡る。第一外科教授の松田から与えられたミッションは心臓移植の研究でしっかり業績を出すこと、つまり評価される論文を書き上げること。さらにこうも釘を刺された。それだけで終わるな、アメリカで医師免許を取得し、心臓手術の経験を積んでこい、と。

心臓手術に限らず、手技の習得には一定数の臨床経験を積む必要がある。アメリカの医療機関は集約化が進んでおり、日本と比較にならないほどたくさんの方が集まっている。そこで修行することは理にかなっている。

しかし、である。医師免許は基本的には各国、国によつては州が管理する国家資格である。日本の医師免許を保持していたとしても、アメリカで患者を診るにはアメリカの医師免許を取得せねばならない。当然、試験は英語である。

研究に加えて、妻の出産も重なるなか、吉川は2004年にアメリカの医師免許を取得、2005年からイェール大学胸

部心臓外科のクリニカルフェローとなった。高度な専門医療を身につけるための研修医だ。

「疾患に関する知識が十分有し、（手術後の）術後ケアおよび術後管理を適切に行うことができる。ただ、心臓手術の経験は10例もなかった。〴〵いつ何者だ」というふうに見られているのも感じました。他と差をつけるには何かと考えたときに日本人の真面目さ、勤勉さしかない。まずは術後管理をきちんとすること、英語は不得手だけれどコミュニケーションはきちんと取る」

回診は朝6時から始まる。吉川は遅くとも5時半には病院に着き、看護師に患者の状態を確認。手術後は、患者が運ばれた病棟まで行って目を配り、カルテに書き込んだ。休日である土日も病床に行き、様子を聞き取ることもあった。

「担当患者がICUでの術後管理を終えて一般病棟へ移ったあとは、病棟担当のチームに引き継ぎます。レジデント（研修医）自身がその後を診ることは通常ありません」

さらに自宅では、糸結びに精を出した。各種の手術器械が発達したが、今でも太い血管は糸で縛り、針と糸で縫い閉じる。針と糸を使った手技は特に心臓外科には欠かせない。「アメリカ人のレジデント（研修医）を見てみると、ある日、突然、（手術を）やってみると針と糸を渡されていた。そ

複数の診療科でロボット支援手術を行なっていた。

心臓外科はロボット支援手術の導入が最後まで進まなかった診療科だった。心臓を一時的に止める必要があること、繊細な縫合操作を狭い視野で行う特性があることが、その主な理由だ。ロボット支援手術はMICSよりも患者の身体を傷つけない。大阪大学医学部附属病院ではMICS手術の延長として保険適用前からロボット支援手術を行なっていたのだ。

2022年10月、吉川はとりだい病院で日本初のロボット支援下大動脈弁置換術を成功させた。大動脈弁は解剖学的に視野の確保が極めて難しい部位に位置し、石灰化した弁を取り除いたうえで人工弁を正確に縫い付けなければならない。難易度の高い手術で、世界でも数カ所の医療機関しか成功していなかった。

そして翌2023年、鳥取大学医学部心臓血管外科学教授に就任した。吉川はこの地で自分が果たすべき使命は後進の育成――すなわち自立して手術を遂行できる心臓外科医を育てることだと言う。そのため、自分の目の届く範囲で経験を積ませている。

「私が外来で最低30分、患者さんに手術のメリット、デメリットを説明します。その上で手術を行う。若手の技術を確かめた上で、手術の安全を担保しながら、どんな若い先生に手術をしてもらっています」

こで成功すれば次に進める。自分の番がきたとき完璧にできるようにしようと考えたんです」

まずは基本の、糸結びを20分で千回できることを目指した。その後、わざと脇を開いて、ペーパータオルを縫う訓練に没頭した。

「不安定な状態で縫っても手が震えないようにする練習です。緊張しないように禅の本を読んだり、呼吸も工夫しました」すべて吉川独自の工夫だ。そして、その日はやってきた――。

「いつも通り、いつも通りと心の中で唱えてました。そうしたら上手くいった。その後、もつとやってみるとどんどん任せられるようになった。半年過ぎた頃には、胸を開けて冠動脈バイパス手術をやっていました」

イェール大学の2年目、心臓弁膜症外科部門の責任者であるサベット・W・ハシムから「自分の専属フェローに1年間なってくれないか」と声をかけられた。レバノン出身のハシムは世界的な手術の名手として知られていた。彼は吉川が術後管理をきちんと行なっているところを評価していたのだ。

「手術の上手な人にありがちですが、ハシムは人に手術をやらせない。だからぼくはこう言っただけです。私は日本から手術の勉強に来た、ずっとアメリカにいるつもりはない。これまで以上に私に手術を教えてくださいるならば、私は全力であな

なにより強調するのは、患者を自分の家族に置き換えて考えること。家族だったら何をしてほしいのか、ということだ。今、若手の医師たちの成長を吉川ははっきりと感じている。

「鳥取に限らず地方は人口が減り、医師が足りなくなるのは間違いない。とりだい病院のいいところは、この地をなんとか良くしようと医師、看護師、事務員までみんなが前を向いていること」

働き方改革もあり、かつての自分のような勤務は若手に強要はできないし、すべきではない。その中で患者にいい医療を提供できるか。自ら考え、工夫、自己研鑽することで補えると吉川は信じている。それはまさに彼がたどってきた道でもある。

文・田崎健太

1968年3月13日京都市生まれ。ノンフィクション作家「カニジル」編集長。早稲田大学法学部卒業後、小学館に入社。『週刊ポスト』編集部などを経て独立。著書に『偶然完全 勝新太郎伝』『球童 伊良部秀輝伝』『ミズノス波特ライターの賞優秀賞』『電通とFIFA』『真説長州力』『真説佐山サトル』『スボーアイデンティティ』『横浜フリューゲルスはなぜ消滅しなればならなかったのか』『カンセン』など。最新刊は『ザ・芸能界 首領たちの告白』（講談社）。小学校3年生から3年間鳥取市に在住。『株』カニジル代表として千船病院広報誌「虹くじら」近畿大学医学部がんセンター広報誌「梅ひょうめはし」大阪けいさつ病院「OIM∞」も制作。

吉川泰司（よしかわ やすし）大阪府出身。1996年大阪大学医学部医学科を卒業後、大阪大学医学部附属病院、大阪警察病院、国立循環器病研究センターで心臓血管外科医として研鑽を積む。2001年からアメリカ4都市の大学で7年間にわたるクリニカルフェローとして臨床留学。帰国後は桜橋渡辺病院、大阪大学医学部附属病院を経て、2020年鳥取大学医学部に赴任。2023年11月心臓血管外科の第6代教授に就任した。

とりだい病院 高度生殖 医療センター

ART 男性不妊 不妊カウンセラー

近年、晩婚化や高齢出産など、ライフスタイルの多様化を背景に、
妊娠・出産を取り巻く環境は大きく変化している。

こうした時代のニーズに応えるため、
とりだい病院は「高度生殖医療センター」を開設した。
センター化の意義、不妊治療の最前線について取材した。

取材・文 村上 敬 写真 七咲友梨



女性診療科、泌尿器科、遺伝子診療科、助産師、検査技師など、多職種が連携して診療にあたっている。

不妊治療の 「内科的要因」と 「外科的要因」



診療科を超えた連携を行う「センター化」は現代の医療の潮流の一つである。初代センター長に就任した谷口は、センター化の意義をこう語る。

「不妊治療には、内科的要因や外科的要因、遺伝的要因がからんでいて、他の治療と連携が求められる症例が少なくない。これまでも必要に応じてその都度連携してきましたが、センター化することで、組織としてより集学的な治療を提供できるようになります」

「内科的要因」の一例は、がんと生殖医療の連携だ。がんに罹^{かか}って抗がん剤治療を受けると、卵巣や精巣に影響が出て、生殖機能が著しく損なわれることがある。

「がん治療を始めた後では妊娠が難しくなるので、治療前に生殖機能を保つ治療をします。具体的には、卵子や精子、卵巣組織などを採取して液体窒素で凍結保存をして、妊孕性を温存。がんの治療は早く始めたほうがよいいため、よりスムーズな連携が必要です」

「外科的要因」には、子宮筋腫や子宮内膜症、子宮腺筋症が含まれる。

子宮筋腫は子宮の筋肉——子宮筋層にできる良性腫瘍。子宮内膜症とは本

女とも2歳ほど遅くなった。

加齢により妊孕率^{にんよう}（妊娠のしやすさ）は低下する。女性の年齢が21〜24歳のカップルの妊孕比を1:00とすると、34〜36歳では0.82、37〜39歳では0.60、40〜45歳では0.40と、30代後半から急激に落ちていく。晩婚化と妊孕率のギャップが、不妊に悩むカップルが増加する根底にある。

そこで生殖補助医療（Assisted Reproductive Technology 以下ART）である。これは体外受精、そして顕微授精など不妊に対する医療である。不妊治療は長らく、排卵のタイミングに合わせるタイミング法や、採取した精子を処理してから子宮に注入する人工授精が一般的だった。それらの治療でも妊娠しないカップルにとって希望の光となったのが、世界的に70年代末から始まった体外受精である。

「体外受精は、精子と卵子をそれぞれ取り出して体外で受精させた後に母体に戻します。ひとつの卵子にたくさん精子をふりかけて受精を促すイメージです」

そして90年代から前出の顕微授精が始まった。

「顕微授精は一つの卵子に一つの精子を極めて細い針を使って注入して受精させます。そのため人工授精より受精率は高い。今や日本では、生まれる子の約8分の1がARTにより誕生して

いるのです」

産科婦人科では出産に関わる周産期医療が圧倒的にメジャーで、生殖医療の専門医は日本で1000人強しかない。とりだい病院は昔から生殖医療も比較の活発だったが、それでもメジャーな分野とは言い難い。

谷口が生殖医療に力を入れるようになったのは巡り合わせだった。谷口が鳥取大学医学部を卒業して研修医になった93年は、顕微授精がこれから日本で普及するタイミングだったのだ。

それから30年以上が経った。ARTの定着に手応えを感じている反面、課題もある。地域格差だ。

「生殖医療の専門医や施設は東京に集中しています。鳥取県でも（西部の）米子市は熱心にARTに取り組んでいる医療機関がいくつかあるものの、（東部の）鳥取市には少ない。そのため神戸や大阪まで治療に行く患者も少なくない」

鳥取県は東西約126km、南北約62kmと横に長い。県西部のみ、一般の不妊治療はクリニック、高度な治療はとりだい病院というように役割分担ができていた。しかし、県全体ではそうではない。

鳥取県全域を高度な生殖医療で支える——。その使命を持って今年4月に誕生したのが、とりだい病院の高度生殖医療センターだ。

「先日、私の担当だった患者さんと偶然会う機会がありました。あのとき生まれた子がもう大学生になったそうで、とても幸せそうでした」

とりだい病院女性診療科教授の谷口文紀は、約20年前の「あのとき」をこう述懐する。

「射精しても精子が出てこない逆行性射精という障害に悩むご夫婦がいらっしやっただです。ご主人の尿道から管を入れて膀胱内にいる数少ない精子を採って顕微授精するしかない。そのご夫婦の場合は、治療がうまくいった子どもができた。奥さんは『人生が変わった』とおっしゃっていた。そういう言葉を知ると生殖医療に長く関わってきよかったですね」

不妊症——妊娠を望むカップルが避妊せず通常の性交を継続的に行なっているにもかかわらず、1年以上妊娠しない状態——に悩むカップルは増えている。

国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」によると、不妊治療を受けたことがある夫婦の割合は、第12回調査（2002年）で12.7%だったが、第15回調査（2021年）で22.7%に。19年で10ポイント増と、ほぼ倍増した。

背景にあるのは晩婚化だ。2024年の平均初婚年齢は男性が31.1歳、女性は29.8歳で、20年前と比べて男

来は子宮の内側にある子宮内膜と似た組織が、卵巣や腹膜など子宮の外にできる疾患。そして子宮筋腫症は子宮内膜と似た組織が、子宮の筋肉の中（筋層）に入り込む疾患だ。こうした外科的要因を抱えていると妊娠しづらくなる。

こうした場合、手術による治療を行うという選択肢がある。

「手術療法で子宮内や骨盤内を整えて妊娠しやすい環境にするのです。ただ、手技が未熟だとかえって子宮や卵巣を傷つけて妊孕性が低下するリスクがある。適切な治療するには、十分な技量を持った医師や設備のもと、手術療法と不妊治療を連携して行うことが望ましい」

連携の核となるのが、高度生殖医療センターである。

そして連携の中でも一番の鍵は妊娠において必須の男性の生殖機能を扱う

泌尿器科との協力関係だ。

「あまり知られていないかもしれませんが、不妊症の原因は男性要因のものも多いんです」と谷口は言う。

婦人科の中で生殖はメジャーな領域ではないことは前述した。泌尿器科における不妊治療はそれ以上だ。

泌尿器科助教の寺岡祥吾の話を聞く。

寺岡は鳥大医学部を卒業後、泌尿器科を選んだ。泌尿器科で男性不妊を扱うことは知っていたが、表面的な知識にとどまり、実際に診察することもほぼなかったという。

そんな状況を変えたのは、現とりだい病院長である泌尿器科の武中篤教授だった。かねてから男性不妊への対応を考えていた武中は、先進的な男性不妊治療に取り組んでいる医療施設に若手医師を送り込むことにした。白羽の矢が立ったのが寺岡だった。



「男性不妊の症例をほとんど診たことがなかったのも、どれだけニーズがあるのかはよくわかりませんでした。ただ、未知の領域ゆえに新しい知識に触れられるという期待感は大かったです」

出向先は山口大学医学部附属病院だった。男性不妊治療で有名な泌尿器科教授、白石晃司のもとで25年4月から半年間経験を積み、10月にとりだい病院に戻ってきた。

不妊原因の半分は男性にある



ここで改めて男性側の不妊について紹介しておこう。

不妊のうち男性のみに原因があるケースは24%、男女とも原因があるケースは24%で、男性に原因があるケースはあわせて48%にのぼる。

もったも多い原因は特発性、つまり原因不明で、4割以上を占めている。

「特発性は根本治療が難しいのですが、精巣は高温で機能が低下するため、サウナや長時間の入浴は良くない。また、膝の上にパソコンを置いて作業するのも、パソコンが熱を帯びるので避けたほうがいい。生活習慣を見直すことで改善する可能性があります」

次に多いのは約3割を占める精索静脈瘤だ。これは精巣から流れ出る静脈が異常に拡張して、こぶのようにふくらむ症状で、精子形成の質が悪くなる。命に別状はないが、妊娠には大きく関係してくる。1時間程度の手術で治療が可能だ。

山口大学医学部附属病院で何より刺激を受けたのは、顕微鏡下精巣内精子採取術（micro-TESE）だった。「主として非閉塞性無精子症に対して行われる治療法です。原因不明の場合だけでなく、遺伝的・後天的な造精機能障害も対象になります。精巣を開いて精子がいないような組織を取り、顕微鏡で見ながら組織から精子を採取します」

精巣を大きく開いて内部を広範囲に探索する、ダイナミックな手術だと寺岡は言う。

micro-TESEは精巣への負担があり、繰り返し安易に行える手術ではない。初回不成功後に再手術を検

そして患者への啓蒙も必要だと考えている。

不妊治療を受け始めてから妊娠するまで平均5〜6年もかかっているというデータがある。一般的な治療から始めて、次に成功率の低い人工授精、それからやっとARTというようにステップを踏むケースが多いからだ。ただ、5〜6年の間に妊孕能が低下して途中で治療をあきらめてしまう患者は少なくない。

谷口は子どもを望むカップルに向けて、こうアドバイスをしてくれた。「重要なのは、妊娠しにくいかなと思っただけ、できるだけ早く専門の医療施設で受診すること、そして結果が出なければすぐ早く次のステップに進むことです。とりだい病院はセンター化で、さまざまな患者さんに寄り添って対応できる体制ができました。これからさらに受診しやすい体制をつくっていきます。ぜひ気軽に相談いただきたいですね」

村上 敬

フリーランスライター。ビジネス誌を中心に、経営論、自己啓発、健康、エンタメなど、幅広い分野で取材・執筆活動を展開。スタートアップから日本を代表する大企業まで、経営者インタビューは年間100本を超える。

討する場合もあるが、成功率やリスクを慎重に評価し、チャンスは一回のみのことも多い。日本で手術を受けられる施設はまだ少ない。寺岡が学んで帰ってきたことで、今ではとりだい病院でも可能になった。

次世代の生殖医療を担うのは医師ばかりではない。助産師の松本知美は今年7月から不妊カウンセラーとして活動している。

松本は中学生のころに助産師を志し、とりだい病院に入職して夢を叶えた。「大学病院で出産する患者さんはハイリスクな要因を抱えていることが多く、そのぶん分娩は毎回緊張感があります。でも、それを超えて赤ちゃんが生まれてきた喜びを分娩室で一緒に共有できるのは助産師の特権です」

とりだい病院では産科の看護師・助産師も女性診療科の外来に出るため、不妊に悩む方を担当する機会は以前か

ら多かった。処置をしながら気になっていたのはコミュニケーションだ。「妊婦さんにはいろいろな不安にならないよう積極的に声かけしています。不妊のことで来られる方もおそらく不安を感じていて、本来なら妊婦さんと同じように声かけすべきです。でも、私に不妊の知識が足りないから、『下手に声をかけて質問に答えられなかったら、余計に不安にさせるのでは』と躊躇してしまう。それが自分でももどかしかったです」

不妊に悩む方にも何か貢献できないか。そう悩んでいたところ、師長から背中を押されて不妊カウンセラーの資格を取得した。「不妊カウンセラーに何かを決める役割はない。求められているのは、患者さんに寄り添って不安な気持ちを吐き出してもらうこと。そう聞いて、私でもできることがあると思いました」

とりだい病院ではしばらく不妊に精通した看護師が不在だった。松本に寄せられる期待は大きい。「意識したいのは、スタッフと情報共有すること。実は先日初めて不妊治療のカンファレンスに出ました。不妊カウンセラーが橋渡し役になってカンファレンスの内容を共有すれば、みんなで患者さんを支えられる。そんな環境をつくりたいです」

高度生殖医療センターという器はできた。そしてその中身となる人材もそろいつつある。しかし、センター長の谷口は、まだまだ足りないと言う。

「例えば顕微授精は針の先に糸を通すような手先の器用さを求められ、私より胚培養士のほうがずっと得意です。ただ、都会には十数人の胚培養士を抱える施設がある一方、とりだい病院は現状で一人だけ。その他にもまだ不足気味の職種も多い。早く充実させたいですね」



夏の祭典！ 来年もやるよー

とりだいフェス TORI FES 2026 七まつり 医療と宇宙が会う日 フォトルポルタージュ

毎年、とりだいフェス実行委員会が掲げる目標は、「次のフェスが最高のフェス」。1月から病院の各部署、外部の協力者が集まって喧々^{けんけん}々々のミーティングを開始した。

開催日が7月5日に決まると「ん？この日、七夕近くない？」という誰かのささやきが。七夕といえば宇宙、宇宙といえば鳥取大学！（ちょっと強引!?）そう、鳥取大学は宇宙研究に力を入れているのだ。そこで、メインテーマは「医療×宇宙」に決定。そんなとき、織姫さまと彦星さまのような運命的な出会いが訪れる。

「カニジララジオ」に鳥取大学と連携している「anulapo（アミューラポ）」の田中克明代表取締役CEOが出演することになったのだ。

anulapoは、VR（仮想現実）やAR（拡張現実）などの最先端技術を用いた宇宙体験コンテンツを制作する、今注目の企業だ。「anulapoさん、フェスに協力してくれませんか」と声をかけると、「やりましょう！」とお返事。

anulapoが運営する「バーチャル宇宙体験フェス」は関東や九州では開催実績があったものの、関西、そして中国では初開催。山陰の子どもたちに宇宙を体験してもらいたいと、とりだいフェス初のクラウド

7月5日、3度目となる「とりだいフェス 2026」が開催された。当日は、3,000人以上の方が来場！これまで同様、医療関係のコンテンツに加え、今年のテーマには『宇宙』が加わった。来場者、スタッフ、ボランティアの方々の笑顔が病院内にあふれる1日。本誌「シン・トリビート」でおなじみ、写真家・七咲友梨さんが、日本一の病院のお祭りを活写！

写真・七咲友梨 文・石谷昌子





ファンディングにも挑戦した。「宇宙といえば星が見たいよね」と会議で話していると、鳥取県出身の奥谷秀平さんが、昨年から日野町にUターンしているとの情報が。奥谷さんは有名アーティストのライブや紅白歌合戦の映像を手がけた、気鋭の映像クリエイターだ。「2026年宇宙の旅」をテーマにした巨大映像（プロジェクションマッピング）を制作してもらうことになった。「どこで上映する？」「屋内で一番広いところはどこ？」「そりゃ外來ホールだよ」ということで、病院に入っですぐの外來ホールでの開催が決定。ところが、外來ホールは横や上から光が入る構造なので、暗くするため全館を消灯し、天井の窓も上から幕をかぶせて塞ぐことに。

医療コンテンツもパワーアップ。毎年大好評の手術ロボット見学ツアーでは、とりだい病院が誇る3機種（ダビンチ、ヒノトリ、ヒューゴ）が一堂に会する豪華なラインナップを揃えた。本物の医療器具に触れられる職業体験企画「とりザニア」では、診察室で記念撮影ができる「診察室スタジオ」を新たに設置。さらに、ニュースでも報じられた栄養部と「味屋」がタッグを組んで開発した「減塩ラーメン」の試食、セラピードッグ（むっちゃ可愛い！）の参加や地域企業による健康促進企画、そしてキッチンカーが大集合。楽しいコンテンツをこれでもかと詰め込んだ。

そしてフェス当日。開場に先立ち、本誌の連載でもおなじみの鳥取大学広報アンバサダー・川口和久さんへの「一日病院長」委嘱式が行われ、華やかにフェスが幕を開けた。

急きょ開催が決まった元プロサッカー選手・長谷川アリアジャスールさんによるミニサッカー教室は大盛況。いつもは静かに診察を待つはずの待合エリアで、子どもたちが元気よくボールを蹴る。普段なら「静かにしなさい」と注意されてしまう場所だが、今日だけは特別な。

屋外では、地震体験車『ぐらっと君』やドクターカーに行列ができ、ゲストハウス棟にもたくさん笑顔があふれる。VR技術を用いた「バーチャル宇宙飛行士選抜試験」のブースで、子どもたちに混ざって、一日病院長の川口さんと武中篤病院長が少年のようにしゃいでいたのは、ここだけの秘密である。

この日本一（当社比）の国立病院内でのフェスは来年も開催予定。どうぞ楽しみにしてくださいね。

ファンディングにも挑戦した。「宇宙といえば星が見たいよね」と会議で話していると、鳥取県出身の奥谷秀平さんが、昨年から日野町にUターンしているとの情報が。奥谷さんは有名アーティストのライブや紅白歌合戦の映像を手がけた、気鋭の映像クリエイターだ。「2026年宇宙の旅」をテーマにした巨大映像（プロジェクションマッピング）を制作してもらうことになった。「どこで上映する？」「屋内で一番広いところはどこ？」「そりゃ外來ホールだよ」ということで、病院に入っですぐの外來ホールでの開催が決定。ところが、外來ホールは横や上から光が入る構造なので、暗くするため全館を消灯し、天井の窓も上から幕をかぶせて塞ぐことに。

医療コンテンツもパワーアップ。毎年大好評の手術ロボット見学ツアーでは、とりだい病院が誇る3機種（ダビンチ、ヒノトリ、ヒューゴ）が一堂に会する豪華なラインナップを揃えた。本物の医療器具に触れられる職業体験企画「とりザニア」では、診察室で記念撮影ができる「診察室スタジオ」を新たに設置。さらに、ニュースでも報じられた栄養部と「味屋」がタッグを組んで開発した「減塩ラーメン」の試食、セラピードッグ（むっちゃ可愛い！）の参加



病院長が
話題の人物に
迫る！

武中篤

武中篤病院長と岡村直樹・アステラス製薬代表取締役社長CEOの対談は「医療のエコ」をテーマとした『カニ
ジル増刊号』（2024年12月配布）以来、2度目。いかに医療体制を持続していくか、その問題意識を共有
している二人。過疎化、超高齢化の地域を支える大学病院病院長と世界の厳しい競争の中で戦うグローバル
企業のトップ——組織マネージメント、そして医療のエコについて深く、語り合いました。

写真 七咲友梨 構成 カニジル編集部

アステラス製薬
代表取締役社長CEO

岡村直樹

武中篤

武中 岡村さんとは共通点があります。まずは同年代であること、そしてぼくが病院長、岡村さんが社長となったのが同じ時期であったこと。違うのはアステラス製薬がアメリカ、欧州、中国に拠点を置くグローバル企業であること。アステラス製薬の社員は半分ぐらいが外国籍でしょうか？

岡村 日本国内での直接雇用は4000人強。全世界で14000人強なので、3分の2以上が外国籍という計算になります。

武中 コミュニケーションの問題はありませんか？

岡村 日本人社員とは日本語、それ以外の社員とは英語。この2カ国語さえ話せばいい（笑い）。

武中 とはいえ文化的背景も様々ですよね。企業として一つの方向にまとめるのは大変だと想像します。

岡村 アステラスは「変化する医療の最先端に立ち、科学の進歩を患者さんの『価値』に変える」というVISIONを掲げています。ここでいう「価値」とは、患者さんにとって真に重要なアウトカムを分子、そのアウトカムを提供するためのコストを分母に置いたものです。私たちは、より良い治療結果を生み出すだけでなく、患者さん、ご家族、医療現場、社会全体の負担を抑えることで、「価値」を最大化することを目指しています。最近の経

営計画2026では、もっと縮めて

「Greater VALUE faster」（より大きな「価値」をより速く）と言っています。国籍、場所に関係なく、このVISIONに共鳴している人が集まっています。患者さんに対して貢献できると思うならば、迷わず実行する。それも速く動く。患者さんのためにならないと思うならば今すぐやめる。患者さんを中心に捉えて判断していく。それに従ってくればいいという考えです。

武中 理念で判断していくというのは我々も同じ。まず患者さん、そして次に地域の方々に貢献できるのか。できるのであれば、多少ハードルが高くて、周りから反対されてもやり通す。そうでないならばやめましょうという考えです。加えて「三方良し」を判断基準にしています。

岡村 売り手よし、買い手よし、世間よし、三方がすべて満足する商売こそが理想であるという近江商人の経営哲学ですね。

武中 我々の場合は、まず患者さんにとって良いこと。次に病院で働く人間にとって良いこと。そして最後が病院として利益が出ること。この三つが揃っているならばやらねばならない。そして継続できるはず。

岡村 継続といえは「医療のエコ」が我々のもう一つの共通項です。

武中 （深く頷いて）岡村さんには釈

迦に説法ですが、医療費、医療従事者

のマンパワー、薬などの医療資源は有限。現在の医療体制を継続、維持していくためにエコロジー（環境）、エコノミー（経済）を意識しなければならぬ。そこでとりたい病院では、月に一度『エコワーキング』を開催しています。

岡村 どのような活動をされているのですか？

武中 「Less Waste」（資源・経費の無駄を省く）「Local Collaboration」（地域連携）「Literacy」（知識啓発）「Long Life Design」（長寿命設計）という4つの「L」というキーワードで何ができるのか、検討しています。

やはり中心となるのは「Less waste」。いかに病院内の無駄を省くか、です。卑近な話になってしましますが、一番効果的だったのは電気代の削減でした。

岡村 これだけの大きな病院になると大量の電気を使いますよね。

武中 それまでも照明のLED化を進めていました。残りすべてをLED化し、さらに電気使用をチューニング（調整）する機器をとりつけたことで約2億円の削減になりました。あとは紙の廃止も進めています。とりたい病院では「とりりんりん」というスマホアプリで予約確認、診察受付、後払いで完結できるシステムがあります。これまで予約票は、紙でお渡ししていたの

ですが、廃止しました。

岡村 ぼくも可能な限り紙の廃止には賛成です。（手元のタブレットを持ち上げて）ぼくはこれだけ、です。自分のところには紙は持ってこないように指示しています。ただ、社内にはまだ紙をたくさん使っている社員がいることは分かっていますが（笑い）。

武中 なかなか徹底は難しい。トップから始めることは大切ですよ。

アステラス製薬に
「社長室」「役員室」はない



岡村 継続という意味では、国立大学病院の経営が厳しい、大半が赤字であると報道されています。その中でも、とりたい病院は黒字を続けており、昨年度は大学病院の中で全国1位の経営成績でした。

武中 とりたい病院は新病院建設に向かっています。つまり未来のために借金をしなければならぬ状態です。そのため現在の経営状態を良くする必要があります。1年だけ1位をとったことに大きな意味はありませんが、頑張った結果が出たことは嬉しく思っています。

岡村 自分たちがやってきたことが間違っていないかと士気が上がりますよね。

武中 ところで、ぼくが興味を持った



すことから始めました。

武中 先ず随より始めよ。

岡村 経営陣が一人ひとり部屋を持つ必要はない。そもそもぼくはペーパーレスなのでキャビネットもいらない。机は共有で十分。今は4階から12階までになりました。

武中 現在、岡村さんはどこで仕事をされているのですか？

岡村 12階の約半分が役員用のエリア、残りは全社員が入りできるオープンエリアになっています。役員用エリアはフリーアドレスでどこに座ってもいい。私はいつもオープンエリア近くのスタンディングデスクで仕事をしています。

武中 オープンエリアは社員および関係者ならば誰でも使うことができるんですか？

岡村 はい、もちろん。コーヒーマシンが置いてあって、自由に飲みます。12階に上がってもらえれば、「今日は（岡村）直樹さんがいるな」って分かる（笑い）。

武中 こみ入った話をしたいというときはどうするんですか？

岡村 役員用エリアは「すのこ」のようなもので緩やかに囲われています。完全に隔離状態にたくありませんでした。いざという時にはすぐに飛び込める小さな密室も幾つがあります。

「地域軸」から「機能軸」そして「出来事軸」へ



武中 我々が進める新病院でも病院長、看護部長などをオープンスペースに集めて交流を促すというのはありかもしれませんが。会って話すことでリアルな情報が共有できるかもしれないですね。その他のフロアはどのようなになっていますか？

岡村 社員に決まった机はなく、それぞれのロッカーから荷物を取りだし、その日によって働く場所を変える。

武中 いわゆる完全フリーアドレス制。

岡村 2005年、山之内製薬と藤沢薬品工業が合併してアステラス製薬ができました。当初は、社員の所属する場所、つまり「地域軸」で管理していました。それぞれの地域にトップがいて、独立してビジネスをしていた。それぞれの地域では上手く行っていたのですが、シナジー効果は全くなかった。

武中 地域の枠を越えた波及効果はなかった、と。

岡村 そこで研究、開発、営業、などの「機能軸」に再編しました。それぞれの部門は全世界で一つの組織として研究、開発、人事もファイナンス（財務）も行う。すると研究者はなるべく早く、

開発の人間に製品を渡したい。しかし、開発の人間は成功しそうにない製品は受け取りたくない、自部門優先で「隣り」のことを考えなくなってしまうた。**武中** 我々、病院でも診療科の垣根が高いと縦割りの弊害が起こりうる。**岡村** そこで昨年4月から「出来事」軸にしました。出来事とは製品、技術プロジェクトなどのことです。権限を委譲された多機能な小さな集団が、自分たちで意思決定、方向修正をしながら進めていく。様々な部署の人間が、

今日は何階に集まろうというイメージです。デスクが固定されていて、あなたはここで働きなさいとか、本社に週4日以上通勤する必要があるとか、そんなルールがあつては駄目なんです。**武中** 他部署の人たちとの交流でイノベーション（技術革新）も起こりやすくなる。

岡村 私たちは、この出来事軸を患者軸とも呼んでいます。何が患者さんのためになるか、そこを第一義とする。冒頭でお話した、患者さんを中心に捉

えて判断していくという働き方です。

武中 とりだい病院では、ロボット支援手術をはじめの際、外科手術を行う診療科を集めた低侵襲外科センターを設立しました。センター化することで診療科の壁をなくしたことに似ている他部署との交流を促すことは大賛成。しかし、我々の場合は患者さんの診察があるのでオープンスペースというのは難しい。

岡村 もちろん当社もお客さまと対面で接する現場や、研究所、工場は別です。一方で、それを支える機能は、組織横断的に連携することでより早く、より大きな「価値」を生み出せると考えています。

武中 働く場所で言えば、遠隔治療が今後の医療のキーワードの一つ。過疎地域、中山間地にたくさんの医者を派遣するのは難しくなっています。どうしても対面でなければならぬ場合は別として、通常は看護師に加えて遠隔治療で医師が対応する。そうすると限りある人的リソース（資源）を有効に使える。

岡村 最後にばくから質問してもいいですか。病院長には任期があります。このとりだい病院をどのように引き継いでもらいたいと考えていますか？

武中 以前、岡村さんから薬の開発は10年単位の時間がかかるとお聞きしました。前の前の社長が手をつけたこと

が今の自分の功績になると。だから岡村さんは今、次の次の社長のために種をまいている。ばくも同じです。とりだい病院が黒字経営を続けられたのは、前任者たちが土地を耕し、種をまき、水をやり続けたからです。私はそれを刈り取っているだけ。そして同時に種も撒いているつもりです。その一つが「医療のエコ」です。次の病院長の考えもあるので強制はできませんが、この医療のエコは継続していただきたいなと望んでいます。

武中篤 鳥取大学医学部附属病院長

1961年兵庫県生まれ。1986年、山口大学医学部卒業。1991年神戸大学大学院研究科（外科系、泌尿器科学専攻）修了。神戸大学医学部附属病院、川崎医科大学医学部、米国コーネル大学医学部客員教授などを経て、2010年に鳥取大学医学部附属病院泌尿器科教授に就任。2017年副病院長。低侵襲外科センター長、新規医療研究推進センター長、広報・企画戦略センター長、がんセンター長を歴任し、2023年から病院長に就任。とりだい病院が住民や職員にとって積極的に誰かに自慢したくなる病院「Our hospital」私たちの病院」の実現に向けて取り組んでいる。

岡村直樹

アステラス製薬株式会社 代表取締役社長 CEO

1962年静岡県生まれ。東京大学薬学部卒業後、1986年旧山之内製薬株式会社入社。2010年米国 OSI ファーマシューティカルズ Inc. CEO、2012年アステラスファーマヨーロッパ Ltd. 経営戦略担当 SVP を務める。アステラス製薬帰任後は事業開発部長、経営企画部長などを経て、2018年経営戦略担当役員就任。2023年4月より代表取締役社長 CEO に就任。



これが、私の

IKIGAI

人生は楽しいから、頑張れる

写真 七咲友梨 取材・文 中原由依子

「君もやってみたいら？」

高度救命救急センター教授の上田敬博さんの背中を押したのは、神戸・三宮にあったバーのオーナーの一言だった。

寡黙なオーナーがターンテーブルを操り、センスのいいソウルミュージックを流す。その店を知ったのは、阪神淡路大震災の直後のことだった。「流れてくる曲がどれも自分の好みとドンピシャで」

上田さんは足繁く店に通うようになる。気に入った曲は、オーナーに曲名を書いてもらい、CDショップを探し回った。そして店に行くと、また新しい曲を教えられる。そんな交流を20年近く重ねるなかで、上田さんに音楽を流す側になってはどうかと勧めたのだ。

実際にDJ機材を購入したのは、とりだい病院に赴任した2020

年のことだ。当初は自分が楽しむた

めだったが、やがてイベント出演を依頼されるようになった。とりだい病院の高度救命救急センターは、地域の救急医療の最後の砦である。その責任者である上田さんの日常は多忙だ。そんな中でもDJ活動を行う理由がある。

「この地域って、みんなで楽しめる機会が少ないから、そういう場を増やせたらいいなと思って」

世代ごとに好きな音楽は違う。だからこそ様々なジャンルの曲をつなぎ合わせることで、若者も年配者も一緒に楽しく、集える空間が作れるのではないか。

DJをしている間は仕事のことを忘れられる。ただ「この地域を元気にしたい」という思いはいつも心の中にある。

上田 敬博

1999年近畿大学医学部卒業。2014年兵庫医科大学医学研究科（生体応答制御系）修了。医学博士。2020年鳥取大学医学部附属病院高度救命救急センター教授に就任。2024年病院長特別補佐（地域連携・医療のエコ活動担当）。

活動内容

外来患者さんへ、検査を行う場所や機械の操作方法などをご案内したり、『とりだいフェス』などのイベントのサポートをしています。

いつから

2025 年 8 月から。

きっかけ

とりだい病院通院時に、患者さんに優しくサポートしておられるボランティアの方を目にし、サポーター制度があることを知りました。十数年前、とりだい病院に初めてお世話になった際の自分を思い出し、少しでも患者さんの不安や緊張を和らげるようなお手伝いができればと思い応募しました。

やりがい

ご案内の前と後で、患者さんの表情が、不安や緊張から安堵や笑顔に変わり、「ありがとう」「居てくれてほっとした」「話を聞いてもらえて嬉しかった」などと言っていたことがあります。患者さんの和らいだ表情や有難いお言葉が元気の源となり、やりがいを感じています。

さらにやってみたいこと

何事にも積極的に挑戦し、スキルアップに努め、患者さんにご案内できることを増やしていきたいです。

とりだい病院のここが好き！

「とりだい病院サポーター制度」が充実しており、活動しやすい環境が素晴らしいと思います。また、サポーター同士の交流の輪が広がり、毎回参加するのが楽しみです。サポーターの皆さんが一生懸命取り組みでおられる姿を見て、得るものもたくさんあり、モチベーションアップにつながっています。

趣味 / 特技

旅行、ランチ会

山陰でお薦めの場所

奥出雲町。米子から車で1時間です。四季折々の風景を楽しみながら、のんびりドライブするのがお気に入りです。おろちループや鬼の舌震などの観光スポットもあり、仁多米や蕎麦など「食」も楽しめます。

一緒に
Our hospital
—私たちの病院—
を作いませんか？

とりだい病院
サポーター通信

写真 七咲友梨

（よみがな）かのう せつこ

名前 加納節子

出身地 鳥取県

とりだい病院では「サポーター」制度として、様々な方がボランティア活動を行なっています。この連載ではこうしたサポーターの活躍を取り上げていきます。みなさんもとりだい病院を「私たちの病院」にしてみませんか？

とりだい病院サポーター制度とは

とりだい病院がより良い病院「Our hospital（アワーホスピタル）-私たちの病院-」に成長することを目指し、広く地域住民の方に病院運営に参加していただくことと導入した制度。ボランティア部門、イベント部門、病院モニター部門、広報活動支援部門の4部門で構成。また寄付によるサポート支援もいただいています。

【募集要件】

- 15歳以上の方 ※中学校卒業以上(未成年については保護者の同意が必要)
- 本制度の趣旨を理解し無報酬で活動していただける方
- 本院の規則を遵守し職員の指示に従って活動していただける方

【申込先】

鳥取大学医学部附属病院 医療支援課 患者サービス係

詳しくはこちら

高校生の頃、保阪正康氏の『大学医学部―80 大学医学部・医科大学の実態―』（現代評論社）を夢中になって読んだことがある。全国の医学部にはそれぞれ歴史と伝統があり、「格」ともいえるものが存在するという世界に大きな衝撃を受けた。

国立大学医学部は、旧帝大（旧帝国大学）、旧六（旧六医科大学）、新八（新八医科大学）、新設（新設医科大学）などに分類されると書かれていた。もちろん公式な分類ではないが、多少の例外はあったものの、基本的にこの順で偏差値が並んでいたと記憶している。

私たちの母校―鳥取大学医学部は、第二次世界大戦終戦直前の 1945 年 7 月 1 日に、官立米子医学専門学校（米子医専）として開校。その後、国立米子医科大学を経て 1949 年に新制国立大学医学部になったので、「新八」の一つである。私が知っていたのは、「山陰地方に医学専門学校を設置することになったのだが、当初候補地であった鳥取市が戦時中の震災に見舞われ、代替地として米子市が選ばれた」という程度だった。

さて、豊島良太元鳥取大学長による『とりだい秘史―なぜ鳥取大学医学部は米子市にあるのか―』が上梓された。

豊島氏は先代の整形外科教授として私の先輩であり、鳥取大学医学部附属病院院長、鳥取大学医学部長も務められた恩師でもある。文学や歴史をはじめ幅広い教養を備え、折に触れて私たちに多くのことを教えてくださった。時には、抜き打ち漢字テストもあつて閉口したこともあったが、振り返れば、本職の整形外科よりもリベラルアーツ

第10回

カニジルブックレビュー

医療従事者は「話題の本」をこう読む

「とりだい秘史」

（豊島良太 著／カニジルパブリッシング）

鳥取大学医学部長・整形外科 教授 永島英樹 評者

を教えてもらったことが多かったようにも思う。私も六十を過ぎて人生を振り返ると、医学以外の学問への興味を育てていただいたことが、自分の大きな財産になっていると感じている。

米子医専の成り立ちについても、折に触れて話をうかがっていたが、本書を読んでもみると、初めて知ることばかりだった。当時の米子市長が元陸軍軍医総監であり、東条英機と同居起居の間柄であったこと、米子市が校舎や病院を提供するなど全面的な支援を行なったこと、鳥取県ゆかりの文部官僚が重要な役割を果たしていたこと、さ

らに鳥取大学医学部となったことで、本部のある鳥取市への移転も検討されたようだが、医学部出身の学長によって米子市での恒久存続が実現したことなど、いずれも興味深い内容であった。

国立公文書館や国会図書館、鳥取県立公文書館などに残る膨大な一次資料を渉猟し、それらを丹念に検証しながら、これまで語られてきた「定説」に再検討を加えている点にこそ、本書の真価がある。本書を読み進めるにつれて、鳥取大学医学部の歴史がいかに多くの偶然と必然、そして先人たちの熱意の上に築かれてきたかを実感させられる。

鳥取大学医学部が創立されて間もないころに入学した大先輩から、「俺たちの頃は、県立だった神戸医科大学より、新八の鳥取大学医学部の方が受験は難しかった。ところが、今では神戸大学に移管され、難易度でも後塵を拝するようになってしまった。お前は恥ずかしいのか」といじられたことを覚えている。面白がっているような表情だったので、本意だったのかは今となっては確かめようもない。しかし、あの時代の卒業生にとって、「新八」という歴史は、母校への誇りを支える一つの拠り所だったのだろう。

本書は、鳥取大学医学部の歴史を知るためのだけの本ではない。戦後日本の医学教育史、地方大学の成立史、さらには大学が地域に育てられてきた歩みを描いた貴重な記録である。鳥取大学医学部に関わる人はもちろん、日本の医学教育の歴史に関心をもつすべての人に、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

永島英樹（ながしま ひでき）
1988 年鳥取大学医学部卒業。2013 年鳥取大学医学部感覚運動医学講座整形外科教授に就任。2017 年病院長特別補佐（教育担当）、卒後臨床研修センター長。2019 年病院長特別補佐（業務改善担当）、2023 年副病院長（経営担当）。2025 年鳥取大学医学部長に就任。豊島氏とは同門の先輩・後輩にあたる。

『とりだい秘史』は、とりだい病院内のローソンで販売中です。発送でのご購入にも対応しています。
お問合せ 一般社団法人恵仁会 TEL0859-387202

カニジルラジオ

放送 土曜ひる 0:25 - 0:55

「カニジルラジオ」(BSS 山陰放送)

毎週土曜日ひる 0 時 25 分から放送中。病院関係者が出演、とりだい病院や鳥取大学をもっと知ることができる番組です。

過去の放送もこちらで聞けます。

21

20



私は米子出身でこの地域が大好き。看護を通じて地域に貢献したいという思いから、とりだい病院に入職しました。

現在は病棟8階Bの副看護師長を務めています。副看護師長になるまでは、患者さんと直接関わることが看護師としてのやりがいだ感じていました。しかし、「ティーチングナース」として新人看護師の教育に携わったときに、一人ひとりの成長を支え、引き出していくことの楽しさと難しさを経験しました。自分が関わった看護師たちがいきいきと働くことが、患者さんへの質の高いケアや、より良い看護の提供につながっていく。その好循環を目の当たりにしたことが大きな転機となり、看護管理者を志すようになりました。

とりだい病院の病院再整備計画という転換期に大切なのは「変化に柔軟であること」であると考えます。新病院では建物も設備もシステムも大きく変わります。新しい病院に期待も膨らみますが、その変化にスタッフ全員が適応していけるか。場所や動線が変われば戸惑いも生まれ、新しいシステムを使いこなせるようになるまでには時間も必要です。一人ひとりの理解度を確認しながら支えていくことが重要で、困っている人がいれば話を聞き、その人に合った方法でアドバイスをしたり、必要な情報を届けたりする。私は、そうした丁寧なサポートを積み重ねて、不安を安心、未来への期待と変え、新病院への移行を乗り越えていけるよう支えていきたい。

今後はAIやDXの進展によって、医療はさらに効率化・

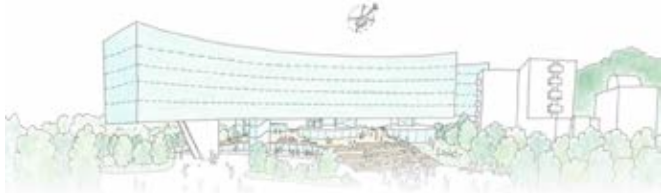
2029年新病院着工へ とりだい「未来病院」発進!!

「私」なら、 こうする & こうしたい!

看護部 病棟8階B 副看護師長
岡 優樹

2011年鳥取大学医学部保健学科看護学専攻卒業後、とりだい病院に入職。2023年より副看護師長。2025年、看護協会主催の「認定看護管理者教育課程セカンドレベル」修了。また、日々実践している看護をエビデンスに基づいて検証・再評価し、より質の高い科学的な看護実践につなげたいという思いから、「身体拘束に関する看護研究」に取り組んでいる。

取材・文 中原由依子 写真 馬場磨貴



高度化していくでしょう。実際に病院では、患者さんのデータをリアルタイムで解析して重症度を見分けるシステムや、血圧・体温などの測定結果を電子カルテへ自動連携する仕組み、AIによる議事録作成など、さまざまなデジタル技術の活用が始まっています。

こうした技術によって業務の負担が軽減されれば、その分、看護師は患者さんに寄り添う時間を増やすことができます。患者さんの話をじっくり聞くこと、手に触れて不安な気持ちに寄り添うこと、入浴や洗髪など心地よさを感じていただけるケアを行うこと——そうした「人にしかできない看護」をこれまで以上にやっていきたい。また業務の効率化によって時間どおりに仕事が終われるようになれば、看護師自身にもゆとりが生まれます。心身が健康な状態であれば、いきいきと看護の力を発揮できる。

AIは看護師に代わる存在ではなく、看護師を支える存在。だからこそ新しい技術を流行に流されるままに取り入れるのではなく、本当に患者さんとスタッフのためになるものを見極めていかなければなりません。そうした試行錯誤や調整に関わりながら、新病院に向けた基盤づくりに取り組み、とりだい病院がこれからも永く地域に愛されるよう、自分の役割を果たしていきたいです。

将来ある子どもたちに 刺激を与えたい!

このカニジルをみなさんが手に取る頃、私は年に一度の収穫に入っているはずです。
今年の夏は非常に暑かった! 鳥取は水が豊富。水に困ることはなかったんですが、暑いと発芽が早い。収穫は例年よりも早くなりそうです。収穫後は広島県などで米を販売するイベントに参加する予定です。年内はずっとバタバタの日々が続きそうです。
さて、さて——。

このカニジルでも取りあげられている『とりだいフェス 2026 医療と宇宙が会おう日』では、「一日病院長」として武中篤病院長とフェスの会場を歩き回ってきました。
印象に残ったのは、とりだい病院が誇る手術支援ロボット。4本のアームのうち、1本にカメラがついています。コンソールの中のモニターでその映像を見ながら、アームを動かすのです。まるでゲームをやっているような、不思議な感覚でした。



写真 中村治 構成 カニジル編集部

別のブースでは、手術道具が展示されていました。プロフェッショナルな道具で、心惹かれるものがあります。医学というのは科学であると同時に、大工さんのような職人の世界でもあるのだと改めて感じました。

普段、病院に行っただとしてもこうした裏側を見ることはできません。そこを開けっぴろげというか、一般の人に解放したとりだい病院はすごい! 武中病院長は、フェスのような「平時」に訪れていただき、病院に対する垣根を低くしたいとおっしゃっていました。確かに、病院を好きな人はいない。ただ、一度でも行ったことがあれば、少しでも気持ちは楽になります。

今回のフェスの目玉でもある『バーチャル宇宙体験フェス』の会場にも足を運びました。バーチャル宇宙体験フェスは鳥取大学とも関わりが深い株式会社 amulapo(アミューポ)の運営するエンターテインメントイベント。1日病院長の特権を利用して、ばくも『バーチャル宇宙飛行士選抜試験』(船外活動試験)を体験しました。これはゴーグルを被り、VR(仮想現実)の宇宙で「唐揚げ」を輪の中に入れるというゲームです。これが面白い! 夢中になってやってしまいました。

会場にはJAXA(宇宙航空研究開発機構)のグッズや宇宙食の販売もあり、未来を感じる場所でした。集まっていた子どもたちの目がキラキラしている。この中から将来、宇宙に関わる人材が出てきてほしい、と思いました。

ばくは鳥取で生まれ、広島、東京で生活しました。鳥取は人が優しく、食べ物美味しい。そして海、山といった自然に触れることができます。本当にいい場所です。ただ、刺激が少ないのも事実。

ばくたちの野球の世界でも、東京や大阪ならば、プロ野球の試合を観に行くことはそれほど難しくない。残念ながら山陰にプロ野球球団はありません。高いレベルのプレーを自分の眼で見ても、感じる機会は限られる。テレビでもいいですが、生の体験に勝るものはないのです。

ばくは今、野球教室で日本全国を飛び回っています。ばくの着る読売ジャイアンツのユニフォームを子どもが「これ、本物?」と聞いてくれることがあります。「もちろん、本物だよ」って答えると「すごい」と目を輝かす。ばくのを脱いで着せてあげると大喜びです。

ばくは子どもからサインを頼まれたときに断ることはありません。野球というスポーツに興味を持つてくれた子どもには感謝しなければならぬ。本当に野球が好きな子どもならばそのサインは一生物の経験になるでしょう。野球に育てられた自分たちの重要な役割だと考えています。

将来ある子どもたちに刺激を与えたいという意味で、とりだい病院とは同じ方向であると改めて実感しました。元日本代表の長谷川アリアジャスールさんの即席サッカー教室も見学しました。ボール一つあればいろいろできるサッカーは羨ましい! 野球でも何かできないか。来年は考えます!

川口和久(かわぐち・かずひさ)

元プロ野球選手(投手)・コーチ、野球解説者・タレント・農家1959年鳥取市出身。鳥取湖南小学校で野球を始め、鳥取城北高校を経て、デュープへ。1980年ドラフト1位で広島カープから指名を受ける。87年、89年、91年には三振王。1994年FAを宣言し、巨人へ移籍。1998年、現役を引退。引退後は、指導者、野球解説者の他、映画やテレビドラマにも出演。新型コロナウイルス禍の時期、母の死をきっかけに神奈川県から鳥取にUターン。農業の他、地元の野球振興に力を注いでいる。2025年11月に鳥取大学広報アンバサダーに就任。



〒683-8504 鳥取県米子市西町36番地
鳥取大学医学部附属病院 広報・企画戦略センター内「カニジル」編集部
TEL 0859-3817039 / FAX 0859-3816992
MAIL byouin-kohou@med.tottori-u.ac.jp



フォトグラファー七咲友梨が切り取る
とりだい病院の日常

シン トリビート

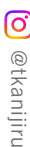
七咲友梨

鳥根県出身。役者として活動後、写真家に。ポートレートや国内外の旅や暮らしの写真を中心に雑誌、広告、Webなどの分野で活動すると同時に、写真展や写真集制作など作品発表も行う。近著に『朝になれば鳥たちが騒ぎだすだろう』『どこへも行けないとしても』（13h/イッテンサンジカン 刊）。映像撮影も手がけ、映画『場所はずいつも旅先だった』（監督：松浦弥太郎）では、動画とスチールの両方を担当。



check!

とりだい病院情報
日々発信中!



@tkanijiru



@kani_toridai



@tkanijiru